

『日本アジア研究』第9号（2012年3月）

ぼくは治療に来たんだと、患者作業を拒否 ——ハンセン病療養所「星塚敬愛園」聞き取り——

福岡安則*・黒坂愛衣**

鹿児島県にある国立ハンセン病療養所「星塚敬愛園」で暮らす、70代男性のライフストーリー。

語り手のKKさんは、1934（昭和9）年、宮崎県生まれ。1955（昭和30）年12月、21歳のとき、敬愛園に収容される。「ここへは治療しに来たんだ」と、園内での患者作業を一貫して拒否。園内での結婚もしなかった。1998年に提訴された「らい予防法」違憲国賠訴訟では、早い時点で原告になって闘った。2010年7月の聞き取り時点で76歳。聞き手は、福岡安則、黒坂愛衣、金沙織（キム・サジク）、北田有希。2010年10月と2011年6月には、補充聞き取りをおこなった。

KKさんがハンセン病の症状に気付いたのは、14、5歳のとき。右手の小指が曲がるなどの、ごく軽い症状だった。ある時期から、保健所職員が療養所入所を勧めに、KKさんの自宅へ来るようになる。21歳のとき、同じ村のYTさんが、ハンセン病の症状が重くなり、敬愛園に入所することになった。KKさんも「家族に迷惑がかかる」と入所を決意。YTさんと一緒に収容バスに乗った。

KKさんは、敬愛園に入所してまもなく、すでに自然治癒し、無菌であることが判明。「無菌なら、なぜ収容したのか。家へ帰せ！」と医者に訴えたが、「予防法があるから」と退所を認められなかった。KKさんは入所後、ハンセン病治療を受けたことは一度もない。手の指に傷ができると、医局では「落としたほうが治りが早い」と切断された。さらに、若いインターンの医者「実験台」にされて、神経が切られ、顔が歪んでしまった。

KKさんは、国賠裁判の原告に立った思いを「カネじゃない。人間がほしかった」と語る。熊本地裁勝訴後の控訴阻止の闘いの局面では、ひとり、ハンガー스트ライキをして頑張りぬいた。

キーワード：ハンセン病、隔離政策、ライフストーリー

小学生のときは運動会で負けたことなし

〔生まれたのは、昭和〕9年の2月。宮崎〔県〕です。〔鹿児島県に〕近いほうです。

〔うちは農家でした。農家といっても〕小さかったです。〔しかも〕母子家庭

* ふくおか・やすのり、埼玉大学教養学部教授、社会学

** くろさか・あい、埼玉大学非常勤講師、社会学

なお、本稿は、2010～2012年度科学研究費補助金基盤研究（B）「ハンセン病問題の《集合的な語り》の記録化の追求」（研究代表者＝福岡安則）の研究成果の一部である。

だった。ぼく、父の顔を知らないんです。知らないはずはないんだけど、覚えがないんですよ。

〔きょうだいは〕5人。いちばん上の姉が去年亡くなったので、〔いまは〕4人になったけど。いちばん上といちばん下が女。真ん中3人が男。〔ぼくは〕そのなかの真ん中です。〔ほんとは〕ぼくの上と下が亡くなってるんですよ、生まれてすぐに。戦前のほうが苦しかったンだからね。〔昭和〕16年に戦争が始まったでしょ。それで、そのときぼくはちょうど小学校にあがったころだった。いちばん苦しい時期だった。食べ物もないし。着る物もないし。カネがあっても衣類も買えなかったしね。配給制度だったし、それも足りないから、くじ引き。

〔農地は〕はっきりわかりませんが、田んぼが5、6反あったんじゃないかしらんと思う。米を作っても全部、供出させられよったから。ぼくたちは、唐芋の葉っぱのツルを食べたりとかしてたんですよ。

〔小さい頃から体は弱かったか、ですって?〕いや、ぼくは、丈夫で、運動神経もよかったほうだった。まあ、いちばん栄養が悪くて、衛生面も悪かったんじゃないと思うんだけどね。それで〔この〕病気になったんだけど。他のきょうだいはみんな病気をしたことがないっちゅうて言いよったんだけど。〔家族親戚でハンセン病になったのは、ぼくだけです。〕ぼくの知ってるかぎりではね。

ぼくがあれしたのは、14、5だった。この病気は2（ふた）種類あるんですよ。〔結節が〕吹き出すやつと、末梢神経をやられる〔やつと〕。ぼくは神経（そっち）のほうだから。小指が、ちょっと少うし曲がってきたんですよ。だから、いつ発病したかと言われても、そればかりはわからない。〔いまでも眉毛、黒々としてるでしょ。〕アッハハハ。

〔学校は〕小学校だけです。〔学校は〕嫌いなほうではなかったんですよ。〔文房具ですか?〕ぼく、運動がよかったもンだから、鉛筆とかあいうものは、体育祭で、1等、2等、3等ってやって、1年分使うだけもらいよった。だから、その点だけは親に迷惑かけずにすんだんだけど。鉛筆1ダースとか、ノート1冊とかって。ぼくは、運動会は負けたことなかったもンだから。ハハハハハハハッ。

〔運動会に母が見に来てくれるなんてことは、なかったですよ。忙しくて。〕むかしは、いまの時代みたいに、未亡人っていう〔ことでの特別〕待遇がなかったからな。男と同じように奉仕作業が多かったもンだから。

海岸近くだから、学校も公民館も兵隊がいっぱい来ちゃって、ぼくたちが学ぶ学校がなかったんですよ。小学校3年生までしか学校は出やらん。志布志湾にアメリカ〔軍〕が上陸するっていう噂（こと）があって、学校には兵隊がいっぱい詰めて、われわれは追い出されたんですよ。だから、勉強っていう勉強は、あまり学校でした覚えはないですよ。

学校のグラウンドも、開墾をして、唐芋を植えて。「兵隊さんのため」って。われわれには回らないけど。そういう苦労してきたから、やっぱり病気になったんだろうなあと思ってます。だからあと10年、早く生まれるか遅く生まれたら、病気にならなかったかもなあっていう感じはするんです。

〔敗戦のときは〕小学校4年生だったのかなあ。むかしは高等科ってあって、兄貴は小学校を出たら高等科に行きよったんですよ。それで、軍隊の関係（あ

れ)に引っ張られて。軍隊には行ってないんだけど、むかしは14,5になったら、軍隊の〔関係の〕仕事をさせられていたんですよ。で、帰ってきて、「日本は負けた」って言うて。ソノとき初めて、負けたっていうことがわかった。

だから、親父がいなかったから、兄もそうとう苦労したろうとは思うんだけど。ぼくは小学校2年生から、炊事のほうをやっていたんですよ。〔薪で竈(かまど)を焚いて。風呂なんかも〕火吹き竹で。マッチも質が悪くて、なかなか点かなくて。

昭和30年12月22日、強制収容

〔ここには〕昭和30年の12月の22日に来たんですよ。21歳だった。〔ちょっと症状が出てからも〕人目にはほとんどわからなかったと思う。自分では、こう、右手の小指が曲がってて。あとは薬指に力が入らなくなってきて。〔知覚麻痺も〕右手の小指と薬指のほうがね。それでもぼくは、この病気の名前を知らなかったんですよ。敬愛園に来て初めて、「らい」っていう病気だっていうことが知ったもんだから。田舎では「こしき、こしき」って言いよった。「こしき」っていう言葉(あれ)は、聞いたことがあるんですよ。ぼくなんかの小さいとき、おそらく敬愛園だったんだろうと思うんだけど、ぼくの下の家には、「鹿児島から逃げてきた」っていう女の人が出て、部屋から一步も外に出なかったからな。この病気じゃったんじゃないだろうと思うんだけど。それでまあ、いろいろと少しは記憶に残っているような気がするんだけど。

ぼくが小学校卒業したときは、〔新製の〕中学って〔まだ〕なかった。〔小学校をおえてから〕うちで、牛を養ったりとか、百姓したりとかっていうことをして。〔そのかんも、村のひとに病気が気づかれて「おまえは、おかしい」と言われたことは〕ありません。

〔昭和30年12月22日に敬愛園に収容されたいきさつは〕近くに、結節らいの人がいて、喉が詰まって。で、きょうだいの人たちが「死ぬ前に医者には一度は診せたい」っていうことがあったんだそうです。それで、医者には往診頼んだら、保健所のほうに連絡がたって、すぐ敬愛園のほうに連絡が来て。そして、保健所からすぐ来た。で、そのときに、ぼくも病気だっていうあれが、感づいちよったから……。ぼくンところには3回ほど来たんですよ、「敬愛園に行け」っていうことで。だけど、ぼくは来る気はなかった。自分で働けよったから。なんでもできよったし。しかし、3回目に、その人が喉が詰まって、保健所から来たもんだから、ぼくンところにも来たんですよ。〔ぼくのことも〕ウワサにはあったんだろうと思うんですよ。で、「一緒に行こう」っていうことで。「あさって迎えに来ます」っていう通告(あれ)があつて。「じゃあ行きます」っていうことで¹。

¹ 2010年10月の補足の語り。〈ぼくは、ここに来る意思(あれ)はなかったんですよ。〔同じ村の〕YTさんが喉が詰まって、もうダメだっていうことで、YTさんの兄さんが「死ぬ前に、一度だけは医者にかけて死なせたい」っていうことで、往診を頼んで。そして、その医者から保健所に〔報告が〕行って、保健所から〔敬愛園へ連絡があつて〕すぐあくる日に迎えに来て。そのときにぼくも、「ついでだから行きなさい」っていうことで、保健所からの入所勧奨(あれ)があつたんですよ。ぼくが拒めば来なくてもよかったんですよ。ぼくの親戚が保健所にいたもんですから。アハハハハ。その親戚の保健所のひとは「行かなくてもいいよ」っていうことは、ぼくにコソツと耳

そのころは、「敬愛園に来たら、死ぬんだ、殺されるんだ」っていうウワサが田舎では流れよった。ぼくもそう聞いていたんです。ぼくの従姉妹が鹿屋の男と結婚しとって。で、敬愛園のことは詳しくはなかったんですよ。「あすこに行けば、亡くなるんだよ」と。「だから、どうかして逃げる、園を一步出る工夫だけを考えろ」と。「出たら、鹿屋のほうは、おれが詳しいから」って、従姉妹の旦那が言うて「くれた。しかし」ぼくは、来る以上はもう戻る気がなかったし、もうここで死ぬんだっていう覚悟は決めていた²。

〔母は〕そらあもう泣きましたよ。しかし、弟と兄貴が喧嘩したんですよ。兄貴がおれを嫌って鹿屋にやるんだと弟が勘違いして。弟はまだ中学校卒業したくらいだったかな。で、「兄貴が見らんのだったら、おれが面倒みる」って言うて喧嘩したんだけど、「いや、そうじゃないんだ」と。「おれのほうから行くって決めたんだから、行くんだ」って。〔いい弟でした。〕ハハハハハ。まあ、結婚するまではね。結婚したときに嫁さんが、「兄さんがもう1人おられるようだけれども、その兄さんのことは全然話をしてくれない。〔なぜなのか〕」っていうことを言ったらしいんですよ。で、「いるよ」と。「鹿屋にいるから、会いたかったら連れて行く」って言うたらしいんですよ。もうそれっきり、一言も聞かなくなったっていうことで……。

〔じつは〕弟は、ぼくンところに面会に来て、田舎じゃダメだから、よそに行行って働くっていうことで、大阪に行ったんですよ。そして、あっちで結婚したんです。〔弟は〕6つ〔違い〕かな。16ンときにぼくンところに面会に来て、ぼくンところから大阪に。兄貴と弟は10（とお）違うかな。親父がいなかった

打ちしたんですよ。だけれども、家族に迷惑がかかる。「おれも行くよ」と。だから、行く前の晩に、ぼくは家族には打ち明けたんです。「おれも、あした、YTさんと一緒に行くよ。〔そう、保健所の職員に〕約束したよ」ということで。そして、兄貴なんかは、ものすごい反対して。みな家族は反対だったんだ。「行く必要はない」と。弟も「行く必要はない。おれが面倒はみる」って。しかし、ぼくもあまりこの病気のことは詳しく知らなかったもんだからね、そのときまでは。）

² 2010年10月の補足の語り。〈〔自殺しようと思ったことはないのか、だって？〕敬愛園にくるまでは、からだがだんだん不自由になっていく時点では、やっぱり、死のうかあと。農薬だけは小さい瓶に入れて、どこに行くでも離れたことはなかったからね。敬愛園まで、その農薬は持ってきたんですよ。これを飲んで死ぬんだっていうことで。しかし、その、持ってきた荷物、どっちへいったかわからん。なくなった。アハハハハハ。〔だから、自殺しようかという気持ちには〕ありましたよ、やはり。だい、ぼくはこの「らい」という病名（びょうき）を知らなかったもんな。ぼくの〔家の〕下にそういうおばさんがきとって。ぼくの同級生の家の隠居部屋が空いていて、そこに夫婦で住んでたんですよ。で、旦那さんは、そこの本家の牛を養ったりなんたりして。それが家賃〔代わり〕だったんだろうと思うんだけど。そのおばさん、顔を見たことがなかった。いっつも部屋のなかに閉じ籠もって、外に出てきたとこ見たことがなかったから、ああ、あのひとが、やっぱり、この病気じゃったんじゃないかなあと思って。「鹿児島から来はったんだ」というウワサは聞いちゃったけど。だから、敬愛園から逃げてきたのかもわからないんだけど。まあ、子どもだから、そうはっきりわからないんですよ。——「こしき」「こしき」言うものな。「こしんどん」って、田舎では言う。だから、そういうひとたちに「こしんどんじゃ」って言ったから、それ耳に入とったから、おれもあの病気じゃろうって。で、敬愛園に来て「らい」という名前を正式に知ったんですよ。〉

から、兄貴が親父代わりだった。だから、弟は兄貴にはなんも言えなかったんです。「[大阪へ] 行きたいんだけど、兄貴に言えないんだ」「じゃあ、こっから行け」。ぼくの背広なんかやって、こっからやったんですよ。「兄貴のほうにはおれがちゃんと話はつけるから」っていうことで。

敬愛園に到着したらバスは消毒で真っ白に

〔収容の日〕 バスで迎えに来たんですよ。警察と保健所と、敬愛園の職員と。その人、結節が喉に詰まって、場合によってはバスの中で手術しなければいけないかもしれんっていうことで、医者まで付いて来たんですよ。〔その人は敬愛園に着いて〕 すぐ、その晩に〔喉を〕切りました。いまも、まだ元気でおるけれど。〔ひょっとして YT さんですか、だって?〕 そうです。〔付いてこられた医者〕は伊藤利根太郎さん。伊藤利根太郎さんは大阪〔大学〕の助教授だったけど、それを辞めて敬愛園の、いまは副園長っていうけれど、医務課長で来ていたんです。

途中で何回もバスを停めて〔YT さんの〕治療しながら来たもんだから、朝 10 時ごろバスに乗ったんだけど、着いたときは〔夜の〕7 時か 8 時ごろだったと思いますよ。いまは 1 時間半で来るんだけど。アハハハハッ。やっとかつと、中古品のバスで。道もいまみたいによくなかったからな。

ぼくは、弟も兄貴もイトコなんかも、8 人付いてきました。その点では、ぼくは恵まれていたほうだなあっていう感じを受けるんですよ。〔みんな一緒に〕バスで来て。ちょうどいまの〔園内の〕郵便局の前で、バスを停めた。まだ乗ってるあいだに、DDT でバスの中がぜんぜん見えなくなるまで消毒されたもんだからね。乗ってる人ぜんぶ、DDT で〔真っ白〕。アハハハハッ。そして、降りて³。

〔付いてきてくれた兄弟やイトコだけ〕いま考えてな、車はそのころ、みんな持たなかったじゃが、どげんして帰ったんかなあと思って思案（あれ）するけど。汽車は鹿屋から通じちゃったけどな。いったいどうして帰ったんかなあ。

〔ぼくは〕すぐ病棟さに行ったけど、病棟の玄関口で素っ裸にされて。予防着と禪（ふんどし）と下駄とあてがわれて、「これに着替えなさい」と。自分の着てきたものは、新しく買ってきたんだけど、どこに行ったか、いまだにわからない。〔予防着って〕兵隊さんの、白衣（びゃくい）ですよ。

名前のことは言われました。来た晩にね。ちゃんと収容係っていうのが事務別館（ふくし）にいて、その方が病棟まで来て、そっで、住所と本名と聞かれて、そして「名前はなんとしますか？」ということ言われたんですよ。「ぼくは KK です」って言ったら、「いや、偽名だ。本名では都合が悪いじゃろう」と。

「偽名にしたら病気は治るのか？」ってぼくは聞いたんですよ。「いや、そう

³ 2010 年 10 月の補足の語り。〈2, 3 年前のことは忘れとつても、最初のことは、ハッキリそのまま、画面に浮かんでくるものね。敬愛園に来たのははじめてだけでも、バスが正門から入ってきたその道路とか、バスを下りた場所、そのままの映像になって浮かんでくるからね。それほど印象が強かったんだろうなあ。職員は目だけ出しとった。〔丈の〕長あい予防着を着てね、夏も冬も。帽子も、ガッツリ、耳まで隠して。で、目だけがちょこっと見えてるときだったでしょう。——56 年かあ。57 年になるのかなあ。敬愛園に来て。長いよお、56 年という月日は。〉

じゃないんだ。みんな偽名を使ってるから」「ぼくは使いません」。ずっとそのまま来てるんですけど。兄貴も「使う必要はない」ということを言った。

“無菌でも療養所に入るのが法律だ”

ぼく、12月の22日に来たけど、正月の中、過ぎても、なンつにも〔治療を〕しない。で、兄貴も何回か面会に来て。「なぜ、治療しないのか？」て、医者にだいぶ兄貴が詰め寄ったんですよ。そしたら、「もう菌はいないから、治療する必要はないんだ」と、医者が言うて。――正月10日ごろだったのかなあ、菌の検査をやって。〔その結果〕菌はいないと。――「じゃあ、菌のいないのに、なぜ連れてきたのか！」って、ぼくもだいぶ食ってかかったンですけど。「〔菌がないなら〕帰さんか！」「なぜ連れてきたのか！」と言うたんです。〔そしたら〕「これは法で決まってるんだ」と。だから、〔ここに来てても〕治療はぼくはしたくないんですよ、本病の治療は⁴。

〔昭和〕28年に最終的な予防法改正があったですね。そのときいちばんきつい法律ができて、それにひっかかって、ぼくたちは強制収容。療養所に入るのに警察が付いてくるっていうこと自体が、ぼくもびっくりしたんだけど。まだ、あまりこの病気のことを知らなかったもんだからね。……だいぶぼくも自棄（やけ）にもなりました。もう、ここに来たら最期だって思ったから、医者も看護婦も怖いって感じがなかったから、だいぶ食ってもかかったしね。

患者作業も園内結婚も拒否

〔ぼくは〕病棟に〔翌年の〕6月までいたんだ。6月に盲腸〔炎〕が出て手術

⁴ 2010年10月の補足の語り。〈保健所から訪ねてくるときは〔集落（ぶらく）の〕いちばん入口にぼくのうちがあるもんだから、〔まず〕ぼくンところに来るんですよ。それで、ぼくが応対するんだけど、〔ぼくが病気だと〕気づくようなふうでもなかった。だから、〔ぼくは〕あんまり外見ではわからなかったんじゃないと思うんです。顔も敬愛園に来てから、ちょっとやられたから。首（ここ）を手術、医者が失敗して。神経を切ってしまうて、顔が変形……、ちょっと崩れたんだけどね。結節が出て〔皮膚の傷んだ〕人たちの手術（あれ）を、医者としてはやりたかったんでしょう。皮膚を移植して、結節の痕をなくするように。ぼくも若かったし、ヤケクソだったからあ。〔その実験台に〕ぼくを使ってもいいよ」と。太腿（ここ）の皮を採って、左腕（ここ）に移植して、移植ができるかできないかっていうようなことを。ぼくが実験台になったんだ。〔ぼくの左腕は〕なんにもない。太腿（ここ）もなんにもない。だから、「きれいな皮膚を移植がしたいんだ」って。これも研究材料ですよ。〔首のところも〕なんもないんです。実験台みたいなもんですよ。全生園（ぜんせいえん）の〇〇園長っておったでしょう。あの人たちが医者に成り立てだったから。こっちに来ていたんですよ。いまでいう研修医。ぼくなんかのころはインターンって言いよったけれども、そういう人たちが来て、いろんなことがしたいわけですよ。ぼくなんかは人間じゃなかったから。一般の人たちをやったら訴えられるじゃろうから。ぼくなんかもう、人間じゃなかったからね。予防法〔廃止〕が平成8年、それまではもう、したい放題だったんですよ。アハハハハハ。〔ふつうは、そういう実験は〕動物でやるんだけど。ここも、モルモットなんかがおったんですよ。しかし、人体実験がやりたかったんじゃないろ、と思う。首（ここ）、血管の移植ができるかっていうことで、ここの血管を採ったんです。そのときに、ここ、神経を切ってしまった。それがいまだに出るんですよ、痛みが。痺れてきてね。〉

して、治ってから、一般舎のほうに行ったんです。「国見」っていう寮に。いま「開聞3寮」になるところ。12 畳半に 4 人。ぼくが入った寮はいい人たちばかりで、ぼくもいちばん若いしあれだったから、よう可愛がられて。野菜からなんから一切もらって。そのころはまだ食べ物がなかったから、自分で作って食べなけりゃあいかんのだけど……。ぼくはなんにもわからないから、「野菜ができたよ」「お茶が沸いたよ」ちゅうて、みんなに可愛がってもらえて。ぼくはその点では、恵まれてたなあと思って。

〔付添看護には出たか、だって?〕いや、〔ここに〕来たときに、収容係っていう人がいたンですよ、〔いまの〕福祉〔課、当時の事務別館〕に。その人たちが「作業は何をしますか? 作業を何かしなければいけないだ」と言ったんです。「ぼくは働きに來たんじゃありません。治療に來たんです。作業はなんにもしません」って、はっきりと断った。ぼくは作業したことはないんですよ。〔作業賃はもらえないけど〕慰安金っていうのが〔月〕500 円あったんですよ。まあ、カネには困ってなかったから。その当時、7 万円持ってきちよったから。うちでそれくらいは持っていたから、そのまま持ってきた。で、弟が働いていたから、弟が来るたんびにくれよった。結婚するまでは。アハハハハハッ。

〔園内結婚はしたか、だって?〕いいえ。まったくその気はありませんでした。ぼくは結婚しに來たんじゃなかったからな。治療に來たもんだから。女のほうから「結婚してください」って言われたこともあるけれども、まったくその気がなかった。それで、看護婦からも、治療中に言われたんですよ。治療しながら、〔人が〕いっぱいおとところで、「結婚してください」いうて。アハハハハハッ。〔ぼくも、当時はまだ〕こういう顔じゃなかったンじゃ。人間の顔はしていたもンじゃからあ。なんかなあ……。突然、治療中に言われたら、こっちがびっくりして。

あかぎれが切れたりしよったからな。だからそんなときに、治療に行くと、むこうはぼくに気があったのか知らんけど、人がいっぱいおとところで、「結婚してください」って言われたから。ぼくもびっくりして、なんの返事もできなくて。〔その後〕その看護婦は、ここを辞めて、全生園（ぜんせいえん）のほうに行って。〔その看護婦さん、よっぽど、思いつめてたんじゃないか、だって?〕どうかしら。ぼく自身、〔その看護婦とは〕馬鹿話はしていたけど、そういう気はまったく〔なかった〕。そういう話が出たことなかったし……。その人は〔その後〕結婚してすぐ亡くなったらしいけど。そして、その人の妹も、この看護婦に、後から入ってきて。で、「姉さんが死んだことを知ってる?」って、ぼくに急に聞いたもんだから、「だれけえ?」って言うたら、「だれだれだ」っていうことを言われて。あら、家では話していたのかなあって。ぼくは、恋愛もなんもしてなかったし、そういう感情もなかったもんだから。〔色恋には鈍感だったのか、だって?〕若かったし、色気はあったんだけどなあ、アハハハハハッ。そういう気分になれなかったんですよ。

節々から落としたほうが治りが早いんだ、と

〔ぼくの指は、昭和〕50 年ごろまでは、〔とくに〕左手はどうもなかったんです。〔しかし、神経をやられているから、しだいに〕曲がってくるでしょう。曲がってきたら、なんやかに引っかけて、割れるんですよ、内側が。そうする

と、むかしはもう、節々（ふしぶし）から切ったほうが〔治りが〕早いんだって、切って捨てよったんですよね。仕事しないんだから、時間かけてもよからうたい、と思ったけど。「節々から落としたほうが、治りが早いんだ」って、ハサミでブツツと切りよった。とくに、ぼくなんか came ときには、〔専門の〕外科医じゃなかったんですよ。昔の軍医だったらしい。その人が外科の治療していた。その後で came 医者が〔ぼくと〕同じ宮崎県〔出身〕の医者で。その先生（ひと）は「どうせ作業、なんもしないんだから、時間はいくらかかっても、少しでも残して治せ」っていうことを言われたんですけど。そのときは手遅れだったんですよね⁵。

母の葬式には帰らず、四十九日に帰った

〔毎日をどう過ごしていたか、ですか？〕まあ、図書〔室〕から本を借りて読んだりとか。その当時はまだ、外出はできなかったんだけど、若かったし、ここに来たらもう人生の終わりだっていう覚悟があったから。〇〇タクシーっていうタクシー会社があって、それがヤクザの経営だったんですよ。それに乗ったら、職員もなんにも言わない。それと呼んで、鹿屋〔の街〕に遊びに行きよったんですよ。ぼくは酒は一滴も飲めないんだけど、飲み屋に行ったりとか。〔ぼくの〕従姉妹の義妹（いもうと）が鹿屋で食堂をやっているから「そこに行ってもいいよ」っていうことを言われたけど、しかし、なるだけ親戚には迷惑をかけないっていう配慮（あれ）が強いもんだから〔そこには足を向けなかった〕。で、その〇〇タクシーをやった〔ヤクザが〕飲み屋なんかもいっぱいやっていたから、ぼくはそこに堂々に行っていたんですよ、ひとりで⁶。

⁵ 2010 年 10 月の補足の語り。〈その〔宮崎県から came〕先生がね、〔この病気を〕気にしないひとだった。腕はもう、すごいよくてね、内臓外科でね。もう came ときから、〔ぼくが同郷だっていうのが〕わかったら、ぼくのベッドに座って、お茶飲み、いっしょにしようたから。で、〔それを〕ほかの職員が嫌いよった。その先生、まったく気にしないひとやった。マスクもしないし。へっちゃらなひとやった。私服で治療もしよったからね。〔そのひとは〕鹿児島に行って開業して、もう亡くなったんじやろな。5、6 年前までは電話で連絡したりしようたんだけど。内臓外科では、九州でも何本かの指に入るひとだっていう。それこそもう、上には強いだよ。患者とか看護婦、下々にやさしいのよ。園長とかあいう上には、もう、頭から突っかかっていきよったから。「病棟にラジオを持ち込んだらいかん」って上からの命令が来ると、わがでトランジスタなんか買ってきて、「使ってもいいっちゃが。大きな声で掛けなければいいんだ」って。「おれが、いまから、園長に抗議に行く」ちゅってな。ものすごい理解のあるひとだった。ぼくは、そのひと、「あんちゃん、あんちゃん」って呼んでやった。その点では、そういう医者なんかに恵まれていたんだなあという気はするんですよ。ぼくはもう、気にいったら、とことん気にいるからな。もう嫌だと思えば、返事もしないから。もう、いい年をしてるんだから、「はい、はい」って言ううちよかにやいかなあと思ってるんだけど。つい、出してしまう。悪い癖。80 になって治っていないから、もう死ぬまで治らん。アハハハハハ。〉

⁶ 2010 年 10 月の補足の語り。〈そのヤクザの親分は、敬愛園の患者にはものすごいやさしかったんですよ。ほんとのヤクザ。〔暴力団は〕弱いひとをいじめる。〔ヤクザは〕弱いひととか女にはものすごいやさしいんだよね。だから、〔最初は〕運転手は〔敬愛園の患者の乗車を〕拒否しようたんですよ。だけど、親分が「敬愛園の患者さんは大事にしろ。ほかのお客さんよりも安くしろ」と。〉

〔当時はまだ外出には〕厳しかったからね。巡視っていうのがおって、見張りしよったから。4人でね。棒を持って。ぼくはもう、怖いものがなかったから。で、山が好きだから、高隈（たかくま）〔山〕に登ったりとか、ああいうことを独りでずうっとしていたんです。

〔逃走してうちに帰ろうとは思わなかったのか、ですって?〕まったくその気はなかったです。一度だけ、母が病気をして、「もうダメだ」っていう連絡があったもんだから。そして、うちの従兄弟が土建業をやっていたんですよ。で、大きなダンプカーで迎えに来たんですよ。まさかダンプカーで迎えに来たとは思わなかったじゃろうから、それに乗って帰って、3ヵ月間家に帰っとった。無断帰省。よほどのことがないかぎりはな、一時帰省の証明書をもらえない。医者診察〔を受けてっていう〕そういうめんどくさいことをしたくなかった、ぼくは。

〔そのときは母は〕よくなって。85歳で亡くなったんです。〔亡くなってもう〕15年から上、ならせんかなあ。あっこに書いてあるけど、何年になる? 〔亡くなったのは平成5年。〕兄貴〔から〕は「〔葬式には〕帰ってこい、帰ってこい」って、ずうっと電話来たんです。「たとえ村じゅうの人が1人も来なくても、わが1人、帰ってきたほうが、お母さんが喜ぶんだから、帰ってこい」って言われたけど、〔親戚縁者が大勢集まる葬式には〕どうしても帰れなかったのよ、ぼく。やはり、気が引けてね。「いいわあ。帰らない」ちゅって、カネだけ送ってあれしたんです。葬式代もだけど、病院代も。やっぱし、兄貴にばかり迷惑をかけられないから。ぼくにとっても親だからね。で、四十九日のときに帰ったんです。

〔外出制限がゆるくなつてからは、実家には〕母がおるときは、年に5、6回は帰ってました。無断で。日帰りだったりとか、1週間ぐらいだったりとか。みんなは、前もって連絡しとって、他人（ひと）が来ないようにしてから帰りよったって言うけど、ぼくはそういうことはまったくなかったんだ。兄貴が全然気にしなかったから。周囲に気を遣わなかったからね。で、黙ってスッと帰りよったんだけど。だから、ぼくは、やはり恵まれてたんだなあっていう感じはするんですよ。

まあ、ぼくの知ってる範囲では〔実家が近隣のつきあいで困ったことがあったとは聞いていない〕。結婚なんかは、もうまったく、ぼく自身がおること自体が支障になったっていうことはなかったからね⁷。

⁷ 2010年10月の補足の語り。〈まあ、〔村のひとの〕なかには〔この病気を〕嫌いよったひとがおったかもしれんけど、全体的には、平気だったんですよ。ぼくがこれから帰っても、「あ、帰ってきたか。よかったねえ」ってから、ぼくのうちに来て一緒にお茶を飲みよったからね。その点ではぼくは、敬愛園（ここ）に来ていろいろと話を聞くけど。みんなが敬遠するとか何とか。ぼくのばあいは、それがなかったもんだからね。〔おなじ宮崎県の椎葉村も、ハンセン病に対する〕差別、ぜんぜんないですよ。椎葉のひとが敬愛園（ここ）に面会に来るんですよ。それで、ぼくたちがそのひとたちに焼酎を差し入れたりしよって。で、「椎葉に泊まり掛けに遊びに行こうや」っていうことになって。「どこに連絡すればいいか?」「鶴富屋敷というのがあるから、そこに電話連絡したらわかるんじゃないか」っていうことで電話したら、「いいですよ」っていうことで、泊まり掛けで行ったんですよ。——知りません? 鶴富姫と那須与一（なすのよいち）〔の弟〕の恋物語。平家と源氏の。那須与一が平家の扇

兄貴は恋愛結婚だったんだけど。ぼくはそのとき病気でうちにいたんだけど、女のほうでぼくを訪ねて兄貴に会いに来ったんですよ。全然気にしてなくて。ぼくが病気だっていうことはわかっとしても、ぼくを口実にして、兄貴に会いに来ったんですよ。

お姉さんもそうです。ぼくが病気だってことわかっとして、むこうは結婚してくれた。そういうことは、ここで、みんな反対されたとか何とか聞くけど、ぼくの場合は、それはなかったんですよ。[いちばん下の妹も、相手のひとが]ちゃんとわかっとして結婚した。

姪は隠していたんですよ。姉貴の子どもは、結婚するときは、ぼく[のこと]を隠して結婚したんです。そこに写真があったと思うんだけど……。これは姪の子ども[の写真]です。この子が中学校卒業するときに、姪が打ち明けたらしいのよ、家族に。こういうおじさんがおるんだってということ。そして、この子を連れてきたんですよ。

自治会では座り込み闘争もして

自治会の活動(あれ)はやりました。20代から平成8年まではやってました。それはもう、園にたいする交渉ですよ。前は[入園者が]1,000人いましたからね。[自治会の役員は]選挙で選ばれて。

ここは患者が全部やっていた、作業からなんからな。ぼくは慣れてきてそれがわかった時点で、おかしいと。患者が患者を見ることはおかしいってことを、20歳代(はたちだい)でそれを感じたもんだから、[事務]本館に座り込みをやったんですよ。「これは職員がやるべきじゃ。患者が患者を見るべきじゃない」。3日3晩やって。そして、不自由者棟の介護員を獲ったんですよ。それまでは患者が看ていましたからね。で、3日3晩[の座り込みを]やって、そして、いちおう切替棟だけは職員に切り替え[させ]て⁸。

ぼくは一般舎から不自由舎に、お願いして舎をなおったんですよ。[不自由舎といっても]いまみたいにセンターではなかったからな。12畳半に4人おって。1人の患者がその4人の患者(ひと)を面倒見ていた。24時間体制でね。こりゃおかしい、どう考えてもおかしい、ということで。で、そこで、どっち

の的を射(う)って落としたっていうあれがあるでしょう。[で、那須与一の弟が平家追討で椎葉村まで来て、平家の鶴富姫と恋に落ちて……という話があるんです。]その鶴富姫の屋敷がいまでもあるんですよ。そこは[国指定の重要]文化財になってて。ふだんはそこは[入れない]。[そこへ連絡したら]「いいですよ」という返事が来て、だったら行こうって、[敬愛園の]友達どうし4、5人で行ったんですよ。たら、鶴富屋敷に椎葉の村の村長から村会議員もぜんぶ来てから、一緒にワアワアやって、交流(あれ)したんですよ。椎葉村っていうのは、山を越えなけりゃ隣の集落(ぶらく)に行けないような僻地だから。で、嫁さんを運転手に連れてきて、男は飲んで、ワアワアやって。だから、あっこは、やっぱり、[この病気にたいする]偏見がないんだなあという感じを受けたんですよ。[椎葉村は]民宿がいっぱいあるんですけど、ぼくなんかは、鶴富屋敷に泊めてもらったですから。]

⁸ 2010年10月の説明。〈いまわたしがいる〉こちらは一般舎、普通舎というんですよ。切替棟というのは、不自由者棟ですよ。目の見えないひととか不自由なひとたち、自分で自分のことができないひとが行く[ところ]。[いまは]センターになってるんです。「コスモス」とか「ばら」とかあるでしょ。で、職員が詰めてるでしょ。〉

かっていうと先頭に立ったちゅうのかなあ。そのことにはぼくはもう、真剣にあれしました。

〔一般舎から不自由舎に移ったのは〕どうしてもぼくは、仕事に来とるんじゃないから、不自由舎で養生（あれ）しようっていうことで。そしてぼくの友達が不自由舎にいたんですよ。そして、「結婚するから、〔独身者用の不自由舎から〕出るから、おれの後に入らないか。部屋が空くが」ということやったから、「じゃ、なおるわ」っていうことで、医者に言うて、なおったんですよ。そのときはまだ患者付添い、患者が患者を看ていましたからね。で、まだそのときは、ぼくも健康があったから、ぼくがお茶を飲ましたりとかなんとかしていたんですよ。盲人が2人いましたからね。夏は蚊帳を張って。

〔だんだん園の中の暮らしがよくなってきたなあと思えたのは〕介護員が入ってから。〔昭和〕40年ごろだったと思うんだけど。それからだいぶ変わってきたなあ。それまでは〔入園者が〕病気になっても、〔舎の〕中に看護婦が入るちゅうことはありませんでしたからね。〔営繕部の〕水道屋の職員（おじさん）とか電気部の職員とかが、資格を持たんのに、注射しに来たりしよったから。で、そういう座り込みなんかやって、介護員が切替棟にだんだん少しずつ入って……。切替棟に看護婦はいなかったんですよ。で、ぼくなんかが執行部にいるときに、そのとき自治会はカネを持ってたもんだから……。豚を1,000頭ぐらい〔飼育していたり〕とか、お茶畑、紅茶畑もあったし。だから、自治会のカネで、介護員を2人、看護婦を1人採用したんですよ、臨時で。それで〔自治会の〕会長なんかを〔園との〕交渉にやって、われわれはこんだけ苦労しているんだと。だから、職員を増やせ、と。

〔そのときの自治会長さんは〕藤原〔頼高〕さんっていう方だったんですけど。ぼくはその人に政治を習って。アハハハハ。〔政治は〕面白いことはないですよ。いつも職員との喧嘩ばかり。そのころ、職員のほうが強かったからねえ。職員にたいする、やっぱり、要望があったから。職員を〔自治会〕事務所に呼んで。幹部連中をね。だいぶ議論もやりましたし。

〔ぼくは、自治会活動をしているときも、他の園にはあんまり〕行きません〔でした。熊本の菊池〕恵楓園には行きました。むこうに友達もいたもんだから、その人たち〔の案内で、自治会〕事務所から、切替棟から、いっさいまわって、見学したりとか。——敬愛園（ここ）は医者が少なかったもんだから、専門医っていうのが。だから、恵楓園（むこう）に転園治療っていうかたちで行った。〔なかには〕そのままずっとむこうに〔いるようになったひと〕もいたんです〕。

〔車の免許ですか？〕取りません。友達が車いっぱい持ちよったから。それでドライブはよくしていました。

〔所外労働ですか？ みんな〕でんぷん工場（こうば）とかいろんな〔ところへ〕行きよったけどな。ぼくは全然、まったくそういう意志（あれ）がなかったから。まあ、なんかなし、山が好きで、山ばかり。

園と自治会の妨害をはねのけての裁判闘争

〔らい予防法廃止は〕平成8年だったかな。そのときに、予防法廃止をそのまますんなり受け入れるかっていうことを、自治会でぼくが質問したんですよ。「予防法があったから、こういう待遇を受けとった。予防法が廃止になったか

ら、おまえたちは勝手にあれしろ、自由に出て行けとかって言われる恐れは、ありやあしないか？ 国の責任(あれ)がなくなるんじゃないか？ そのへんは、はっきりと念を押して、国との交渉をやれ」っていうことをな。だいたい議論はしました。急に予防法がなくなって、そのまま放っておかれたら、行き場がないからな。やっぱり、世間もそういう、予防法がなくなったからって、おおっぴらになるわけでもないし。いまの保障だけは絶対に確保(あれ)していけ、と。会長なんかをどンドン国にやりましたからね。[そのときの自治会長は]川邊[哲哉]さんじゃなかったかな。そして、おかげさまで、二階堂[進]さんと山中[貞則]さんがいたからな。この代議士(ひと)たちに電話なんかで交渉しましたからね。

[そのあと、平成10年に]最初、9名で裁判を起こそうってなったんですよ、敬愛園でね。そして、ぼくにも[誘いが]来たんですよ。ぼくは、姪がまだ[ぼくのことを]隠して結婚してたもんだから、「賛成は大賛成じゃ」と。「だけど、兄貴に言うて、姪に迷惑がかからないか確かめてから、原告に入る。[とりあえず]応援はする」っていうことで。で、ぼくも兄貴に電話して[了解してもらって、原告に]入ったんですよ。

[ぼくは、ここに収容されて、ぜんぜん治療もしてないんだから。]アハハハハ。自然治癒ちゅうのが、ほんとうじゃないですかね。だから、ぼくはここに来なかったら、こんなに[手足が]不自由になってなかったやろなあとって。いままで生きてなかったかもしれないけど、ここに来たから、いろんなあれで。まあ、洗濯も、いまみたいに洗濯機はないし。お湯は使えないし。氷が張るところで、洗濯をしなければいけなかったしね。それであかぎれが切れたりなんたりしたもんだから。わが家におったら、母なんか洗濯なんかもしてくれたやろなあとって。

[賠償金は1,400万円もらいました。]すぐ、兄貴にほとんどやりました、迷惑かけたっていうことで。[ただし]1,400万だったけれども、そのあいだの準備[でずいぶん費用]が[かかって]……。自治会も、園も、大反対だったでしょう。村八分にされたからね、[原告になった]20名ぐらいが。で、[原告には]会場も貸さないし。田中民市さんがそこにいたんですよ。[民市さんの一戸建ての家は]道を挟んですぐ隣です。夫婦部屋だから、2部屋あるんですよ。そこの部屋で会合。弁護士なんかも、報道関係も来て、いろんな作戦を練りながら、やったもんだから。食事からなんから、ぜんぶこっち持ちやったでしょう。[原告が]たった20名だから、それだけでは国は相手にしないと。外部の人たちに応援してもらわないかんということで、鹿屋なんかに行って、集会を開いて。松下[徳二]さんたちの支援する会ができてきて。で、鹿児島[市]のいちばんの繁華街の天文館なんかに、そうとう行きましたよ。[それから]西本願寺[別院]とか、東本願寺[別院]。——あまり[裁判のための集会をする]会場がないもんだから。東本願寺のひとが、支援する団体に1人、入ってくれたんですよ、鹿児島で。そのひとを頼って、東本願寺[別院]に行って。そこで一般のひとたちを[対象に、裁判を起こしたのは]こういう理由(あれ)だといって説明しながら、応援者を募って。西本願寺は、敬愛園[のお寺]が西本願寺ですから。そのつながりもあって、依頼(あれ)したんですよ。——それも園が大反対じゃから、[園には]バスが4台あるんじゃないけど、バスも出さないから、自分たちでカネを出して、行って。鹿屋にも、何十回と行きま

したしね。〔熊本地裁に行ったのは〕15回かな。

〔判決の日も熊本地裁に〕行くつもりだったんですよ。ところが、「ここに取材が来るから、何人かは残れ」って、ぼくと田中〔民市〕さんは残されたんですよ。奄美〔和光園〕と熊本の裁判所と敬愛園とで、三元中継を生放送で流すっていう企画（あれ）じゃったけど、〔園は〕中継車を敬愛園に入れなかった。だから、あの正門の外でやったんですよ。今泉〔正臣〕園長が当時の園長（あれ）で〔裁判に大反対〕。職員も入園者も〔みんな反対〕。ぼくなんか村八分だったからねえ。もう〔口を〕きかない、まったく。「カネが欲しいばかりに！」っていうような感じで。カネじゃないんですよ。やっぱり、人間がほしかったんですよ。まあおかげさまで、鹿屋で3,000人ぐらいの応援ができたしね。学校の先生を筆頭に。で、鹿児島〔市〕に支部を作ってもらったし。だから、裁判を全国であれしたっていうけど、要は敬愛園で勝ったんですよ。敬愛園で勝ったから、それが全国に〔波及した。東京地裁も岡山地裁も、後は〕ぜんぶもう、ただ形式的な裁判だったんですよ。

弁護士も、よくしてくれたからね。わずか20名ぐらいの原告に200何十名の弁護士が応援に来てくれたからね。われわれだけの力じゃ、とうてい勝てなかったと思う。外部の人たちのおかげじゃろうと。で、報道関係をフルに使おうっていうかたちだったんですよ。世間の人たちが知らない。だから、報道関係を、テレビも新聞もぜんぶフルに使って、啓発（あれ）をしてもらおうって。おかげさまで、テレビも新聞もよく取り上げてくれた。

〔裁判には勝つと思っていたか、ですって？〕ぼくは思ってたからね。ぼくは原告に入るときに、徳田〔靖之〕弁護士と〔話し合った〕。「国を相手だから、簡単にはいかないよ。水俣病でも何十年もかかっているんだ」と。「簡単にはいかないから、死を覚悟してかかるよ」と。で、徳田先生にもぼくは詰め寄ったんですよ。「あなた方はそれまでやってもらえるか」と。徳田弁護士とぼくとの約束は、〔裁判に負けた場合は〕徳田弁護士は熊本の裁判所で焼身自殺をやる、ぼくは園長官舎に行き、そこでハンストをやって亡くなる。で、勝利の判決が出たでしょう。しかし〔5月〕25日が控訴〔の期限〕の日だったんだよね。ぼくは〔5月の〕15日から23日までハンストをやったんですよ。いっさい、なんも食ませずにな。おそらく国は控訴するだろうっていう予測（あれ）があったから。で、控訴したら、ぼくは園長官舎の入口で座り込みをやるっていう覚悟は決めてたからね。ぼくはまだ不自由舎のほうにいたもんだから。だから、なっんにも動くもせず、ただ、ベッドに寝たっきりだったんですよ⁹。

⁹ 2011年6月の補足の語り。〈裁判を始めるときに、〔敬愛園では〕最初は〔原告〕9人で下準備をしたんです。そのとき、ぼくに誘いがあって、ぼくは徳田弁護士に「国は簡単には飲まないでしょう。やる以上は、ぼくは命を懸けてやります。あなたがた弁護士にもその覚悟があるか」って詰め寄ったんですよ。そしたら、「それはもう、最初から、その覚悟でおります」と、弁護団代表の徳田弁護士が言われたから、「じゃ、やりましょう」と言って、ぼくは原告団に入ったんですよ。

判決の日、ぼくと田中民市さんも〔熊本地裁まで〕行くつもりでいた。そしたら、「敬愛園（こっち）にもテレビ局とか新聞社の取材（あれ）がくるので残ってくれ」って言われて、残ったんです。で、田中民市さんのうちでテレビを一緒に観てたんですけど。そして、判決が出て、勝利したら、熊本に行った衆（しゅ）は、その足で熊本から飛行機で国会に行き、小泉さんと会うんだと。したら、どうしても会わない

〔ハンストって、おなかは〕へらない。もう覚悟、国を相手に覚悟を決めとったから。やる以上は、そこまで腹を決めてやらなければいけないということ。ぼくは原告に入るときに、徳田弁護士と約束をしたからね。そう簡単に勝てるものじゃないと。徳田弁護士も「おれは裁判所で焼身自殺をやる」と。ふたりで約束したんですよ。ハハハハハ。

しかし、〔そこに至るまでも〕ここではそうとう苦労したからねえ。〔園内の〕公会堂で、現地〔出張〕裁判があったんですよ。そのときも、おおきなビラで、反対のビラがあつて。職員はぜんぶで公会堂を取り巻いて、外部からの人を入れないようにしたとかね。それをテレビ局がぜんぶ映したもんだから、よけい、国は悪かったンじゃないかなあと思った。あれで〔われわれには〕かえってよかったかもなあ。園も自治会も、「〔裁判のおこなわれる〕公会堂の中に、傍聴者は入（い）れない。原告団以外は入れない」ということだったから。いちおう最初〔中に〕入ったんです、報道関係も、支援団体も。そしたら、えらいやかましく言うてきたから、〔いったん〕「みんな、原告団も出れ」と。外に出したんですよ。で、自治会〔事務室〕の前まで行って、「いまから一緒になって、報道関係も、支援団体も、入るから」つって。そして、入ったんですよ。それが映ってるからね、テレビで。〔ただし、法廷には規則で〕テレビ関係は入れなかったから、〔テレビ関係者が外に〕出てから、裁判を始めたんですよ¹⁰。

と拒否されて。何日か頑張っても、それでも会わないと。ちょうど判決があつた日が、5月の11日だったかな。ぼくは、15日からずっと食べずにいたんです。ただ、ベッドにひっくり返とった。ちょうど兄貴が米を送ってきたが、それは〔袋の〕口も開けずにそのまま置いとった。ぼくは、そのときは切替棟にいたもんですから、職員がご飯を三度三度持ってくる。「きょうは体ン調子が悪いから食べない。捨ててくれ」ちって、捨てさせよったんですけど。もうそのときは、ぼくのハラが決まっとったからね。ぼくは、ハンストのことは、誰にも言わずに、黙って始めた。〔自分の〕部屋でやってるときには、ただ「具合が悪い」ちゅうだけでやっていたんだけど。

ただ、どっから、どう漏れたのか知らないけど……。兄貴に電話で〔それとなく〕別れを言うて。〔上京してる堅山勲に電話して〕「おれも頑張るから、おまえたちも頑張れ。絶対、控訴阻止（あれ）するまでは帰ってくるな」って言うた。〔それと〕東京の全生園に、ぼくの友達がいたんですよ。全生園はあんまり裁判には賛成でなかったなかで、ぼくの友達は裁判には大賛成で、自分はムラ八分にされてるということだったんで、その男にも電話して、「最後まで頑張ろう」ちゅって、励まし合っていたんですよ。で、〔5月23日に〕国が控訴断念ということになったら、どこでバレタの知らんけど、鹿屋の支援団体の衆（しゅ）と報道関係が、ぼくの部屋に入りきれんぐらいドツと来たんですよ。ぼくは、国が控訴した時点で、正式にハンストをやるっていうハラだった。そのときは公表して、園長官舎の木戸口で、雨が降っても、座り込んでやるっていう覚悟まで決めていたんだな。あすこで死んでやるんだっていうことで。でも、そのあいだでも、食べなくて。で、控訴断念をテレビで知って。ああ、よかったあつて。それで、疲れがドツときてな、動けンくなったんですよ。弁護士が書いた本（『開かれた扉——ハンセン病裁判を闘った人たち』（講談社、2003））には「2日（ふつか）」って書いてあったけどな、15日から〔23日まで〕断食。」

¹⁰ 2010年10月の補足の語り。〈〔敬愛園で〕現地裁判をやって、いろんなものを調べた。現地検証。そのときに、ホルマリン浸けの胎児（あれ）が見つかったんですよ。7体でしたっけ。髪の毛のはえた子どもたちがあって、「これは自分の子だ」っていう

「われわれが裁判に」勝ったら、もう、職員連と一緒にあって、いちばーん自治会〔執行部〕で大反対してた〔人たちまで〕、いまでは自分で裁判に勝ったようなこと言うてるけど、こおの、バカたれがっ！ と、ぼくはいまだに思うんだけど。

そこ、〔うちの〕隣が共産党〔員〕だけど、彼（それ）も〔自治会執行部と〕一緒に大反対だったんだから。ものすごいやりあったんですよ、彼（それ）と。「共産党でありながら、なんで反対するか？」っていうことで、ガンガンやりましたよ。まあ、いままえば、そうとう嫌なこと言うてきたなあ、と思ってるんだけど。まあ、勝ったからね、おかげさまで。

ここを地域の医療基地にしたい

「この将来構想についてどう思うか、ですか？」いや、それがぼく自身、わからないんですよ。もう何十年って、将来構想、将来構想って集まりをやりよるけど、まだそれが青写真（あれ）がないからね。ぼくはもう、いまのままで、自然消滅っていうかたちをとったほうがいいんじゃないかなあと〔すら思う〕。それとも、ここを大隅半島の医療基地とすべきかなあ、っていう感覚は持ってるんですよ。裁判では〔療養所に入園者が最後の〕1人になってもいまの生活水準を落とさないっていうことを、はっきりと明言されたからね。いや、こんだけの施設があって、いまだにまだ舎（いえ）を作りよるから。ここを大隅半島の医療の基地（あれ）にしたらどうかなあっていう感覚は持ってるんだけど。

そうとう空き部屋があるでしょう。〔入園者を対象に自治会は〕これの〔アンケート〕調査もしたんですよ。「一般の人たちを、借りる人がおったら入れたらどうか？」っていう質問（あれ）があったけど、大半が「入れるべきだ」。「電気代とガス代だけもらえばいいじゃないか」「家のまわりだけ掃除してもらっただけでも助かるんじゃないか」ということでね。だったんだけど、全然、そのことにたいする反応がないからなあ、〔自治会〕執行部が。

〔入園者の多くは将来構想問題に〕ぜんぜん関心持っていないね。もう年取って、意欲（あれ）がないんだろうと思う。しかし、いまさら外に出るとかいうたって、出るわけにもいかないし。〔平均年齢〕82歳か〔それ〕以上だからね。もうこのままで置いて、一般の人たちを舎のほうに入れるべきだという感覚は、ぼく自身は持ってるんですよ。一般の人でも〔ここに〕住みたいという人がいたら、貸せばいいじゃないかと。家賃を取る必要もない。せつかく、あるんだから。鹿屋でもそうとう家も持たん人も多だろうから、っていう感覚はぼくは持ってるんですよ。そして、治療もここで受けさせてもいいんじゃないか。ただし、そりゃあ無料ではいけないけど。

敬愛園の入園者（ひと）たちも、いま、治療はほとんど外部に行くからね。委託治療ばかりで、ここじゃ治療しないから。〔ここは〕ただ、寝たきりの人の介護（あれ）してるだけ。ここは、賃職まで〔入れると〕職員が400からおる。〔患者より職員のほうが多くなってる。〕ほんとはここに〔外の社会の病人を〕受け入れるべきなのに、〔ぎゃくに、この病人を〕外部に委託治療す

ひとが1人わかったんですよ。で、ここで、共同供養をして埋葬（あれ）したんですよ。だから、裁判がなかったら、その子どもたちもそのままわからなかったろう。）

るっていうことは間違ってるって、ぼくは医者にも言うんだけど。徳永先生って、もうここを辞めて鹿児島の方で開業〔医〕をやってますけどね、その先生（ひと）のときには、朝 10 時ごろから晩の 7 時 8 時まで、外部の患者（ひと）も一緒に治療していたけどね。その先生（ひと）がいなくなってからもう、外部の治療ちゅうのは、ないもンね。「恥ずかしくないか。国立でありながら、民間に委託治療に連れて行くっていうこと。こりゃ、逆じゃないか。ここで〔外の患者も〕診察、治療したらどうか」っていうこと言うんだけど。医者は、それにはニタァッと笑って、なんの返事もしない。

〔ここは、医者の方〕定員 11 名だから、常勤が 11 名いるんですよ。それ以外に、医療援助って、5、6 人〔よそから〕来ますからね。泌尿器科から皮膚科から精神科までね、ぜんぶ来るんですよ。〔しかし〕ここの常勤でありながら、1 週間に 2 時間か 3 時間しか働かないからね。歯科だけです。歯科の先生だけは、月曜から金曜日まで、朝から晩までやってるね。外部からも〔患者が〕そうとう来る。腕もいい。ほかのところは〔ふだんは〕いないの。耳鼻科にしても眼科にしても。眼科が、木曜日の午前中 10 時から 11 時まで。金曜日が午前午後ちゅうけども〔午後は〕いない。耳鼻科が週 2 回だけど、午後から〔診療は〕ないからな。昼からも治療してるのは、歯科だけ。〔しかも〕内科の診察日に行けば、医者がいないのよ。「きょうはだれだれ〔先生〕の診察日です」っていうから行くと、いないんですよ、10 時が過ぎても。で、電話かけて呼んでもらって、診察をしてもらうんだけどね¹¹。

次は若いひとの考えを聞きたい

〔約束の 11 時を過ぎたけど〕いいです、まだ来ないから。姪が来ることになって、宮崎から。〔甥姪といっても〕兄貴にゃあ、女ン子が 1 人しかいない。で、大阪に、弟に 2 人、妹に 2 人、子どもがいる。弟の子どもが、誰に似たか知らんけど、京都大学の大学院まで出てる。話だけ聞いてます。その子は、ぼくがおることは知らないんです。会ったこともない。アハハ。写真だけは持ってきたけども。

ぼくだけ、くだらないことばかりしゃべって。なんか言いたいことがあったら……。若い人たちに、やっぱり、知ってもらいたいなあっていうこと、ぼくたちのことをね。それはあるんですよ。ぼくは、みなさん若い人たちが、どう思っておられるかなあと思って。若いひとたちの話を、ぼくは、ほんとに聞きたいです。年寄りのひとたちは昔のあれで、この「らい」っていうことはわかっていて、やっぱり、昔の偏見（あれ）があるじゃろうからと思っているから。いまの若いひとたちが、この病気に対してどういう感覚をもってるのかな、っていう興味（あれ）で、若いひとの話が聞きたいんですよ¹²。

¹¹ 2010 年 10 月の補足の語り。〈この水曜日も行ったんですけど。ぼくの担当医が診察日だったから。いないもン。2 時間待ったけど、来なかったから、もう帰ってきた。あとで看護婦が薬だけ持ってくるんですよ。アハハハハ。なにをしてるのかと思うンですよ。ここの常勤じゃから。外来におらんでも、どっかに詰めて、本館でもおればいいんだけどよ。いないもんな。給料を正式に、国家公務員としてもらってるんじやから、〔他の病院に〕アルバイトに行ってもいいけど、ここを重視してもらわないとね。〉

¹² 2010 年 10 月の補足の語り。〈ぼくは、いろいろあっていいと思うんですよ。しっか

りとわかったうえで、嫌うなら嫌えと。あなたたちみたいに五体満足ではないから。まあ、しかし、これがぼく自身だからね。ぼくは、心だけはあれしたくない、ひがみたくないという感じがあるから。ぼくも人間だと。たまたまこの病気になって、こういう不自由になった。これで嫌うひとは嫌ってもいいと。ぼくも、健常なひとで見たくもないようなひともあるからね。だから、ぼくがこういうからだから嫌われるのは当然だっていう感じはもっているんですよ。だから、それをどうだって思わない。そのひとを憎むとかそういうあれはまったくないんだけど。ただし、人間としては見てもらいたいなあと思ってるんですよ。人間としてはね、おなじじゃと思うんですよ。ただ外見が違うっただけで。しかし、ぼくはもう、隠しもなんもしません。ぜんぜん。どこに行っても。鹿屋にも、ぼくはまだ、あげん厳しいころでも、パチンコ屋にもどンドン行ってましたからね。隠さずに。〔バネを〕はじくあれじゃなくて、ハンドルになってからじゃったけどもね。ぜんぜん隠さずに。そのころはまだ、〔鹿屋の町の〕パチンコ屋のガラス戸には「伝染病お断り」って大きく書いてあったんですよ。だけど、ぼくは平気で行ってましたからね。そして、お客さんが〔直接〕「帰れ」とか、店員に「〔敬愛園の患者は〕帰してくれ」ということ言っていたんですよ。「なにを言うか、おれはおれのカネで遊ぶんだ。おまえたちに言われる必要はない」ということで、堂々とぼくは隠さずにやっていました。アハハハハ。〔でも〕ほかの入所者（ひと）はみんな、帰されよったですね。ぼくは帰らなかったの。「おれは自分のカネでやるんじゃ」ちゅって。だけど、けっきょくは、堂々と、みんな、後から行きだしたけどね。

鹿屋は、遊ぶ場所がないんですよ。なんにもないからな。ばら園があるだけで。まあ、1回行けばもう、それでおしまいだものね。パチンコ屋は時間潰しにはちょうどいいからな。退屈なときには、すぐパチンコ屋さんに行くんですよ。もう、いまは止めたけどな。まあ、みなさんが、こうして来られるということ、ありがたいなあと思って。これだけ、やっぱし、だいぶ、われわれへの偏見もなくなっていきよるかなあっていう気はするんですよ。ね。)

**Saying “I Came Here to be Treated,”
I Rejected Forced Labor for Patients:
An Interview at Hoshizuka-Keiaien, a Hansen’s Disease Asylum**

Yasunori FUKUOKA & Ai KUROSAKA

This is the life story of a man in his 70s residing in Hoshizuka-Keiaien, a national Hansen’s disease asylum located in Kagoshima Prefecture. Mr. KK, the interviewee, was born in Miyazaki Prefecture 1934. In December 1955, at the age of 21, he was confined in Keiaien. He was forced to work there, but he rejected this, firmly asserting that he was there to be treated, not to work. He did not get married in the facility. He became one of the plaintiffs in the lawsuit against the Leprosy Prevention Law from an early stage. At the time that this interview was conducted in July 2010, he was 76 years old. The interviewers were Yasunori Fukuoka, Ai Kurosaka, Sajik Kim, and Yuki Kitada. Follow-up interviews were also conducted in October 2010 and June 2011.

He first discovered the symptoms of Hansen’s disease when he was around 14 or 15 years old. It was not that serious, the little finger on his right hand being bent. Later, however, the staff working for the public health department regularly visited him to recommend that he enter a facility. In the year when he turned 21, Mr. KK found that his neighbor Mr. TY was going to enter a facility for the disease. He decided to enter the facility as well so as not to further burden his family, and both men took the same bus to the facility.

Soon after he entered Keiaien, it was found that KK’s disease had been already naturally cured, and it was confirmed that he has no longer the bacteria. “If the bacteria are gone, why I am still institutionalized? Let me go home!” he told the doctor, but learned that he would not be permitted to return home “because of the Hansen’s Disease Prevention Law.” Since the time of his arrival he never received a single treatment for Hansen’s disease.

When he hurt a finger, the medical center told him that “the treatment will be faster without it” and proceeded to amputate it. Even worse, a young and inexperienced intern damaged a neuron during the operation for his “training,” straining his face.

KK expressed his feelings when he became one of plaintiffs in the lawsuit as follows: “It is not about money. I wanted humanity.” After he won the case in Kumamoto, he conducted a hunger strike by himself to prevent an appeal by the Government.

Key words: Hansen’s disease, segregation policy, life story